

審査の結果の要旨

氏名 小見山 陽介

本論文は、1851年のロンドン万博の会場として建設されたクリスタル・パレスに関する研究である。本研究では、とくに1851年にロンドンのハイドパークで建設された仮設の万博会場建物と、それを解体・移築してロンドンのシドナムの丘に建設された常設のレジャー施設「クリスタル・パレス」の2つの建物を対象として、構法的な観点から研究したものである。すでに失われて現存しない建物について、博覧会会場建設時の施工図面を中心的な資料として、さらに移築の際の記録写真や関連する文書資料なども駆使しながら、現存しない建物を即物的なモノとしての視点から研究しようとした、きわめて挑戦的な研究といえる。

本論は「序章」「第1～4章」「結章」に加えて、充実した「資料編」から構成される。以下、各章の内容を概観する。

「序章」では、現存しないクリスタル・パレスが現在もなお、さまざまに注目を集める存在であることと、また多様な先行研究のなかで扱われてきたことが指摘される。それに対して本論の研究方法が、当時の施工図面の分析を中心とした「歴史的リバーエンジニアリング」ともいべき方法であることが論じられている。

「第1章 既往研究で描かれたクリスタル・パレスの建設」では、特に重要な先行研究のうち、和文文献としては、松村昌家、ジョン・マッキー（星和彦訳）、佐藤彰、難波和彦、クリス・ウィルキンソン（難波和彦他訳）のもの、欧文文献としてはペドロ・ゲデス、ヘンリック・シェーネフェルト、クリス・ジェシー&ウィル・ロック、ハーマイオニー・ホブハウス、ロンドン博物館考古学財団、コンラッド・ワックスマンの研究がとりあげられ、本研究の研究関心との関係が論じられた。また、クリスタル・パレスに関する一次資料の所在調査について説明がなされた。

「第2章 同時代資料が描いた、クリスタル・パレス」では、第1章で収集、整理された一次資料から「博覧会会場の建設記録」「解体と移築」「売却」「火災

による焼失」に関する資料のそれぞれの詳細な読解と分析が試みられた。これにより、1851年のクリスタル・パレス建設から、1936年の火災焼失までの間に、この建物がどのように変化してきたのか、その詳細な経緯が実証的に明らかにされた。また、もうひとつ本章において、記録写真がリトグラフによって複製されたため、実際にはある程度の不正確性を伴っており、その点に留意する必要があることが指摘された点は重要である。このことから、本研究で扱う写真資料（リトグラフ）は、重要な史料ではあるものの、一定の注意が必要であることが明らかになった。

「第3章 同時代史料の分析と考察①：職能と越境」では、自身が収集した資料と先行研究の成果を用いながら、一連の事業に関わった人々がどのような役割を果たしたのかという点について、詳細に整理された。クリスタル・パレスに関する一般の理解としては、しばしばジョセフ・パクストンの貢献ばかりが強調されがちであるが、ここではパクストンの真の貢献が何であったのか、また同様にこのプロジェクトに関わった人々の役割がどのようなものであったのかについて、丁寧に整理された。とくに本研究の独自の視点として重要なのは、万博会場としてのクリスタル・パレスから移築後のクリスタル・パレスへの時間変化を扱っている点で、その際のパクストンをはじめとする関係者の役割の変化が明らかにされた。

「第4章 同時代史料の分析と考察②：材質と部品」は、本研究の中心的な研究成果を成す部分である。ここでは現在参照可能な唯一の「施工時の図面」に近い資料である一連の図面（*The Building Erected in Hyde Park for the Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations, 1851* に収録）の分析が進められた。1851年に公刊された資料に収録された図面の位置付けに関する分析も重要なが、これらの図面を元に、改めてクリスタル・パレスの建物で使用された部材の材料を丁寧に分析し、それらをすべてカラー図面として再整理したことは、本研究のもっとも重要な成果のひとつである。なかでもトラス材として木材と鋳鉄と錬鉄が使い分けられていたことが明瞭に示され、そのことが構造的工夫、意匠的工夫、ディテールや接合部の工夫などに基づき、使い分けられていたことが明らかにされた点は重要な点である。

また、本章では同時代の建物としてクリスタル・パレスとの密接な関係が指摘されてきたいくつかの建物の現地調査も行われ、本章でなされた施工図面の詳細な分析の成果に基づいて、それらの建物が現実にどの程度クリスタル・パレスの建物と関係を有していたといえるのか、詳細に検討された。

「第5章 クリスタル・パレスの建設における新たな視点」は「結章」にあたる章である。ここではクリスタル・パレスにおける技術的、意匠的な試みを「クルドサクな技術」と呼びながら、鉄骨構造黎明期における構法的な試み

を歴史的に研究することの意義が論じられ、それを「建築構法史学の試み」として、最後に結論づけられている。

また資料編では、本研究で収集された資料がリスト化されて整理され、なかでも 28 枚のクリスタル・パレス施工図面について、その原図と本研究によって CAD 化され、その材質が色分けで示された図面がすべて収録された。

以上のように本論は、近代建築史上で鉄骨とガラスの建築の可能性を開拓した重要な建物としてよく知られてきたクリスタル・パレスの建物について、特に構法的な観点から、詳細な研究を積み重ねたものである。現存しない建物であるがゆえに、いっそう「神話化」が進んだクリスタル・パレスを施工図面に基づいて「物質的に」研究することに成功した本研究は、建築史研究に新たな可能性をもたらしたものとして、高く評価することができる。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以上